

武蔵野日曜聖書講筵 年頭集会

人生の歌

——詩篇第23篇——

1989年1月8日

小池辰雄

昭和天皇の心の痛み 手島さんからの百通の手紙 十字架を土台とした聖霊 エホバよ、汝こそわが牧人 十字架の門を通ると若草の野、憩いの水汀 聖名のゆえにこそ 僕の伝道はまちがっていたよ（塚本） 上から中に入ってきて来る力 父の全きが如く全かれ キリストの本願は私たちを追跡し圧倒 人生の歌（ロングフェロー） 僕の十字架はまちがっているでしょうか（手島）

【詩篇23】（私訳）

ダビデの絃歌

1 エホバこそはわが牧人、私は何も困らない。

2 若草の野に彼は私を臥させ、
憩いの水汀に伴れゆき給う。3 わが魂を彼は甦らせ、
義しき道に導き給う、聖名のゆえにこそ。4 また縦い死の陰の谷を渉るとも
私は禍害を恐れない。あなたは共に在ますから。
あなたの笞、あなたの杖、それが私を慰める。5 あなたはわが眼のあたりに筵を備え給う、
わが諸々の敵前で。あなたはわが首を油漬けにし給う、
ああわが酒杯は溢れた。6 誠に善福と恩恵とが私を追跡する、
わが生命の日の限り。かくて私はエホバの家に住む、
日に日が続き果てるまで。

●昭和天皇の心の痛み

1月7日の6時33分、日本の国の徴、象徴である天皇陛下〔裕仁、昭和天皇、1981〕



1989」がみまかれた。私は明治の人間ですが、もちろん小さい時ですから、明治天皇にお目にかかったことはない。昭和の天皇はお目にかかったことがあります。私の今生きている二番目の兄貴は侍従武官〔小池龍二陸軍少将、侍従武官 1945/4/1～1945/11/30〕でしたから、毎日お目にかかっている。侍従武官で残っているのは私の兄貴一人なんです。天皇陛下が正直、平和の方で、戦争はもちろんしたくなかった。これは兄貴から聞いたことです、弟の秩父宮が

「戦争はするな」

としきりに兄さんの天皇陛下にも言っていたそうです。天皇陛下はもちろんそのことは賛成だった。ところが、イギリスに行かれて、

「君主は憲法をしつかり守れ」

ということをやイギリスでもってだいたい聞いて、その言葉がある意味において禍いになった。自分の意志でなくて憲法に従ったということで、戦争にいやいやながらのりきった。これが大変なマイナスになった。日本それ自身についてまた別なプラスの面もありますけれども。非常な犠牲において民主主義になったが、その民主主義がまたまことに思わしからぬ民主主義になっている。これがまた結局、日本人自身の責任ですが。

ということは結局、本当の宗教をもたない。その点で天皇陛下も本当の信仰があまりにならなかったことは残念なことです。しかし、自分の意志でなくても、

「この戦いの全責任は自分が負う」

と。マッカーサーとの会見で天皇陛下がそのことをはっきり言われたので、彼は、

「未だかつてこういうことを言った帝王というものは歴史上ない」

と、非常に驚いた。そのことをある人が――加瀬という人ですか――マッカーサーの言葉を全部言わなかったんですが、

「私が全く驚いたことには、天皇は全責任を負う、自分をどのようにしても構わない」

と。もう死を覚悟しておられた。そのことでマッカーサーは全く参ったんです。

「これは大変な方だ」

というので、非常に天皇とは心の親しさを増したということです。それは私の兄貴からも聞きました。

「天皇陛下は本当に私心のない方だ。非常に事実をよく認識なさる。戦争がどのよ

うにして負けていくかも知ちゃんと予想しておられた。その通りになって行つた」

と、兄貴は驚いていました。参謀本部が間違つたいい加減な報道しているが、ある時非常に怒られたそうです。そういう天皇陛下自身は非常に矛盾の現実の中におられた。

だから、この8月15日には、本当に自分の心は痛むという。天皇陛下の病気の内的な原因はその痛みにあったと私は思う。心の痛みです。そのことを誰も言わね。非常に多く



の臣民を犠牲に供したから。そのことは本当に痛い。下血とか出血とかいうのは結局、痛みの血なんです。あれは補給する必要は本当はなかった。もう自然の死にまかせた方が天皇陛下の本当の心だと思う。

感情は外にお表しにならなくとも、内側には深いものをもっておられた。人間天皇を――私は現実には知りませんが、兄貴から聞いている話ですが――本当に兄貴は尊敬していました。今荻窪にいる二番目の兄貴のことです。武官長の次の、陸軍少将でやめた。あれは参謀本部にいたら、巢鴨で首になるところでしたが。全く人の運命また歴史すべてがものすごいドラマです。

今日、私は詩篇のどれをやるかとあれこれと考えたのですが、結局、詩篇23篇におさまったのは、

「死の陰の谷を歩むとも」

という句があったので、天皇陛下の死をおもいながら、それで23篇にしたわけです。

●手島さんからの百通の手紙

それから、もう一つ申し上げたいことは、手島（郁郎）さんのこと。私が一緒に、1950年11月3日から5日に阿蘇で集会をした。私はもちろん手島さんに呼ばれて行った。

「是非来ていただきたい。これは小池先生を中心にした集会だ」

と、これは手紙に書いてある。あのときは多分、詩篇を講じたと思いますが。そのあとで、1952年の元日に出かけた――「聖書一卷の旅」という、著作集〔第九巻『感想と紀行』第4章紀行集〕に書いてあります――それで始めの数年は手島さんと非常に親しくやっていた。そのときに大方、手島さんからもらった私への百通の手紙――百通以上です――それが吉村（騏一郎）君という手島さんの第一人弟子が伝記を書くというので、

「それでは参考になるだろうから貸してあげるよ」

と。そうしたら本部〔原始福音の〕の人が、

「まずちよつと本部で拝見させていただきたい」

といってその手紙を全部コピーした――その中のどれだけを吉村君が参考にしたかは知りませんが――彼らは驚いた。手島さんがこんなに小池先生に感謝しているのかと。実は彼らの集会が今、あるひとつの行き詰まりを来たしている面があるものですから、

「是非、小池先生に来てお話をしていたらどう」

ということになって、昨年12月18日と25日のクリスマスに因み、また手島さんの聖霊を受けてからちょうど40周年、手島さんが天界にいつてから15周年、そういう記念の集会をするのに――今までは幾人かを「講師として」呼んだ――ところが今度は、私だけなんです。

「小池先生のお話だけを聞けばいいんだ」



と。非常にそのところが今度ははっきりしている。それで、私は手島さんとの友好関係を、それから私の信仰告白をはっきり言いました。それは、

「53分の35」

であると。これを黒板に書いたら、みんな何のことだか解らない。これはイザヤ書の53章と35章だよと言った。イザヤ書53章はキリストの預言、十字架の贖いの預言です。彼が碎かれたことによつて我々の罪が贖われた。即ち、十字架の碎けのことです。

この碎けの神学を一番先に喜んでくれたのがやはり手島さんなんです。そして彼は別に刷つて集会の人たちにわけた。けれども、手島さんは、もちろんそれをキリストの碎けとは受けとつたでしょうけれども、どちらかというと、手島さんの信仰は自分の魂の碎け、詩篇51篇のあそこの碎けの方に傾いていた。キリストの十字架の碎けのことを、私が受けとっているほどには、はつきり受けとらなかった。そこに彼らの信仰の弱さ、欠陥があった。というのは、あの人はもともと霊的な人です。カリスマ的な力をいただくのにふさわしい素質をもった人ですから。それで、聖霊の働き、カリスマ的な働き方が前面にでる。よく私の集会から手島さんのカリスマ的な働きに魅せられて、幾人か行つた。その連中が今度は私のところへ来て、

「お願いします」

とやつて来たから、ふしぎな回り合わせです。今度、私の集会から三人の人がやつぱりある人のカリスマ的なものにひかれて行きました。結構です。そしたら、別に今度は三人の方が入つていらつしやつた。ふしぎなことです。

カリスマはカリスマでいい。けれども、大事なのはカリスマ〔霊的賜物〕ではなくて、カリス〔恵み〕、恵みなんです。恵みが、恵みのひとつの現象としてカリスマが出る。カリスマとは霊的な働きのこと。聖霊の実存そのもの、これはキリストがカリスでありカリスマである。もうはつきり、キリストは、土台はカリス、恵みなんです。

ということは、罪の赦し、永遠の生命を与えること。罪の赦しと永遠の生命の救い、これがカリスの世界です。それからいろいろな、病が癒えるとか、いろいろなことが展開していくということがみんなカリスマ、霊的な働きの世界です。パウロは両方ともはつきり分けて書いてます。コリント前書12章から13章、14章のところ。そう意味で、いいですか、皆さん間違わないでくださいよ。大事なのはこのカリスの、恵みの世界ですから。今日の詩篇にも出てきます。旧約聖書で「ヘセッド」（恩恵）という字です。

●十字架を土台とした聖霊

私は大体、原則としてここで1か月に3回の集会をしますが、あと4回目、5回目のにきにそれぞれの、この集会の方々の幾人かのグループとか、あるいは一人で結構です。一人でお過ごしになるとときには是非、私の書いたものを、聖書のかたわらジックリ読んでく



ださい。特に第一巻(『無者キリスト』)と三巻(『無の神学』)と十巻(『聖書は大ドラマである』)、これが中心です。第二巻はうしろの方は要らない。始めの方の第一部のところ。[第二部の]「無教会の神学」のところは要らない。あれは無教会はかくあるべしという神学なので。とにかく、この「無の神学」はそこらの神学とは違いますから。あなた方は私の話を聞いていらつしやるから、なにも神学といったつてむずかしくはないです。それから、今度の第十巻は、私はもう200冊くらい人に進呈しました。みんなそれぞれのところで、

「第十巻のその日のところを、聖書を開きながら、読むことに決めました」

と。お一人で過ごされる時は、どうぞ、じっくりお読みください。また幾人かるときも、ご参考に読んでいただければ結構です。そういうようにして、ガツチリ組んでいっただきたいと思う。そして、新しい方との交わりも大いにやってね。とにかく、縦の関係は立っても、横の関係の愛ですね、愛の交流が正直足りないところがあるようですから。どうぞ、愛の交流を大いになさってください。

それで、この「53分の35」の話をした。結局、「十字架の贖い」ということに対する認識が非常に浅かったということに、彼らは気がついた。

「先生のお話をもつと聞きたかった」

と、あとからどつちでも言われました。手島さんの奥さんが私の話したことを更に強調して言ったそうです、この十字架の面を。十字架を土台としなければ、ヘタすると、聖霊が聖霊でなくなる。あぶない。

「この53分の35は分数ではないよ、割り切れないよ」

と、半分冗談なんかいながら。この53、35というのはふしぎな数になる。53章がキリストの十字架の贖いのところです。キリストの地上での、マタイ・マルコ・ルカ・ヨハネのキリストの福音そのものは全部35章。キリストが地上に天界を展開しながら歩いておられたわけですから。この事態はもちろん聖霊の現実です。聖霊の力でやっているんですからね、聖霊の愛で。

手島さんの『聖霊の愛』という本は素晴らしい。とにかく、マルチン・ルターの『クリスチャンの自由』、親鸞の『歎異抄』、手島さんの『聖霊の愛』、この三つは珠玉篇といってもいい。ただ『聖霊の愛』にはやはりちよつと十字架のことが欠けていますけれども。ヨハネ書簡がおもに書いてある。ヨハネはあまり十字架を言いませんから。手島さんの性格はむしろヨハネ的なんだ。

その地上のキリストの実存そのものが黙示録でもって今度は、大希望として展開しているわけです。黙示録の終わりの方。だから、これは黙示録の預言にもなっている。キリストの光は一切のものを照破しますから、仏教の世界も全部これを包摂することができます。私の神学の構造は、

「碎け・突破・包摂」



なんです。キリストの碎けをいただき、キリストの聖霊の突破をいただく。聖霊は突破するからね、我々の中に聖霊が突破して入ってくる。「突入」でもいい。「突破・突入」。それから今度は、一切のものを「包摂」してしまおう。

「父の全きが如く全かれ」

という世界です。包摂の世界。サタン的な偽りの世界は、これはみんな排除しますよ。そうでない、およそまことのことは全部、包摂する。天界には、キリストのキの字も知らない人が天界にいきます、いくらでも。誰か知らんやです。ただ、

「聖霊に逆らうものはゆるされない」

と、キリストが言われた。これはおそろしい言葉です。ステパノも、

「汝らは聖霊に逆らう」

と言って叫んだ。パウロはこれに本当は胸を貫かれたわけだな。それでパウロはひっくり返された。その隠れた原因はステパノの殉道の死にあった。そういうわけですから。

そういうものすごい構造で、世界中の古今の素晴らしいものは全部、これを包摂する光をもっているから。私はその角度から詩を書かざるを得ない。

それで、本当は――集会は私は死ぬまでやりますよ――けれども、もう他のことをやっているといまはないです、正直。だから、もう手紙のお返事もあるいは書けなくなるかもしれない。僕から返事が来なかつたら、

「先生は祈ってくれた」

と、そう信じてください。いい加減にはしませんから。この詩は正直大変なんだ。大体、85才にもなつてこれから十何年かかつて詩を書くなっていうバカ者は、ドンキホーテみたいなやつは世界にいないでしょうけれども。これはみ霊の力があるから、私はそれを実証せざるを得ない、絶対に。烈々たるものが来ていますから。そういうわけで、皆さんとたのしく勇ましくやつて行こうと思う。

●エホバよ、汝こそはわが牧人

詩篇23篇はもう何回もお話しました。けれども、常に新たです。著作集第四巻の『詩篇珠玉集』には京都での講筵のそのままだが載っている。おうちに帰られて暇があるときに読み返してみてください。

ドイツの旧約研究家は、ダビデの歌はおよそ詩篇の中にはないくらいのことを言う。けれども、何といつてもダビデの詩が根底になつていと思う。それに尾ひれがついたりしている。読んでみると、どれが尾ひれだか大体わかる。23篇でも第6節は多分尾ひれだね。尾ひれがわるいと言っているのではない。

ダビデという人は本当に彼自身の性格がドラマチックだし、生涯がドラマチックだ。ドラマの典型みたいな人だ。プラスもマイナスもいろんなものをもっている。しかもそれが



キリストの系譜の、

「アブラハムの子、ダビデの子」

なんて書いてあるから、おもしろいね。それをみたって、聖書はドラマだ。

「聖書はドラマであると、よく先生は言ってくれた」

と、あるゲーテ研究の詩人が言ってよこしましたけれども。

では、詩篇23篇を自分の訳で読みます。

1 エホバこそはわが牧人、私は何も困らない。

2 若草の野に彼は私を臥させ、

憩いの水汀に伴れゆき給う。

3 わが魂を彼は甦らせ、

義しき道に導き給う、聖名のゆえにこそ。

1節、2節、3節は正に天国的です。

1 エホバこそはわが牧人、私は何も困らない。

この「エホバこそは」という言い方は素晴らしいんだけど、

「エホバよ、汝こそは」

と、本当はここは祈りのすがたで言ってもらいたかった。こういう三人称的に書いてあっても、読むときはその奥を読んでくださいよ。福音の世界は、聖書の世界は全部、一人称・二人称だと言ったでしょ。対決の世界、対話の世界、体当たりの世界です。

「エホバよ、汝こそはわが牧人、私は何も困らない」

と。牧人は羊の群を飼っているけれども、このときに、「我々は」とは書かない。「私は」と単数、これは結構です。あなた方は複数ですけれども、一人びとりの本当の単数をもたない複数はダメです。それは烏合の衆という。あなた方一人びとはかけがえない一人びとりです。それは単数なんです。天下一品の単数です。落ちこぼれなんてものはひとつもない。私の詩にはそういうようなのが全部出てくるから。教育の面のことも必ず書くから。論として書くのではない。詩として書く。子どもは幾人いても、一人びとりは親にとってかけがえない一人びとりです。勉強ができるできない、そんなことではない。

今日は孫たちに来て聞けと言ったが、来ているか、来ていないか。うむ、来ているな。男の子は来ない。

「少し意見がちがう」

とか、生意気なことを言っていた。

「意見がちがったって聞け」

と言ったけれども。そんな今から意見もヘツタクレもないんだ本当は。こういう大真理は黙って聞いていればいい。そのうちに本当に光がくるから。今にそのことが分かるでしょう。まあ皆の前でそんなことを言っただけで済んだけれども。それは龍一を私は愛するから。



龍一はイギリスへよく行ったよ、それこそ一人で。この前の夏、ケンブリッジへ。ロンドンにも行ったらしい。イギリスの国旗を買ってきた。すばらしい国旗。彼は掛けなくなった。よし掛けなさいと。1日、2日、3日と、イギリスの国旗と日本の国旗をあそこに掲げておいた（笑）。本当だよ。

万国旗をかけたっていいんだよ、本当は、世界平和のためなら。今度、ドイツのも買ってこよう。ドイツ大使館へ行ってもらってこようかな。ソ連だつてかまわない。どこだつてかまいやしない。私はそういったイデオロギーを超えた世界にいますから。どこの国の人でも、それぞれのイデオロギーはそれぞれの真理性があります。

まあ偉大な政治家がいらないね、今、本当に日本には。結局、人物がいらない。人物をつくるのが本当の教育でしょ。教育がダメだから、結局、日本の本当の欠陥は教育にある。教育の欠陥は教育者自身にある。教育者の魂が。だから、私は時々言うように、全国高等学校長会議のときに、

「校長さんたち、みんな山へこもって、冥想し祈ってからやろうじゃないですか」

と、三回言ったよ僕は。文部省の役人がみんないたよあそこに。一向さしかえない。それだけの権威を私たちはいただいているんです。ということは、論より証拠なんだ。私の教育の方針は、西郷南洲の

「敬天愛人」

だ。これを貫いてきたから。

「私は宗教的な根底から教育しますが、いいですか」

と、天野先生に頼まれときにはつきりそう言った。

「ああ、結構です。やってください」

「それなら、やります」

と。それで私は学校の朝礼のときには必ずその角度からものを言つて来た。先生方は誰もそれに共感してこない——まあ「誰も」と言ったらちよつと言い過ぎだけれども——それでいい加減で、獨協がいやになった。だから辞めたとは言いませんけれども。愛すればこそ逆に怒りも出てくる。私的な怒りではない。

内村鑑三先生は本当に棄身の伝道をされたわけだ。悪口を言われながらも、

「しかし、この国には愛想がつきた」

と言った。藤井先生は

「日本よ、亡びよ」

なんていう詩まで書いてしまった。内村鑑三、藤井武の精神は、もちろん私はつないで続けています。けれども、「精神」ではないんだこれは、「霊」の世界は、み霊の世界は。もうひとつ「キリスト直結」の世界です。だから、私は著作集全十巻は書いたけれども、これを本当に詩に表さなければ。



それから、新しい年号は「平成」という。これはいい年号だね。地には平和、それから天が成るという。

「地平・天成」

なんだ。シナの古典からきている。なにもシナからばっかりもつてこなくてもいいんだけど。でも。「天」という思想はシナ思想です。絶対的なものを非常に「天」という語でいつている。特に孟子には多いね、天が。老子もそうですけれども。孔子ももちろん言ってます。

「地に平和」

ではないんだ、本当は。「平安」だ。平安が本^{もと}の平和。平安を本にしたところの平和です。天意が成る。だから、天地融合のことばとして素晴らしいよ、この「平成」というのは。言が成るのを誠という。言ったことが必ず実行されるのを誠という。

●十字架の門を通ると若草の野、憩いの水汀

「エホバ、実存主こそ、わが牧人。私は何も困らない」

これはイスラエルの個人およびイスラエルの民族のすがた。遊牧の民だから。日本人にはあまりよく分からないんだ、こういうことを言われても。彼らは生活体験からこういうことを言っている。日本人は農耕の民だから。彼らは元のカナン民族です、本質的には。あとから農耕ももちろんイスラエルもやりましたけれども。

だから、「犠牲」なんてことが出てくる。私たち東洋人の肌には本当はこの十字架というのは合わないんだよな。仏教的なものの方が日本人の肌には合うんだけど。肌に合うよりも今度は、魂の世界でひっくり返されるものすごい世界は、やはり悟りではなくて、創造的な生命的な世界です。

2 若草の野に彼は私を伏させ、

憩^{いこ}いの水汀^{みぎわ}に伴れ行き給う。

「詩篇23篇の如き」

と、私は時々言うでしょ、それはこの句のことです。

「十字架の門を通ると、その先は詩篇23篇のようなところですよ」

なんて、よく言いました。それはこの句です。即ち、

「みどりの牧場、いこいのみぎわ」

という素晴らしい、誰もこれを嫌うものはないところ。そこは聖霊の風が吹いている。神の、天気、天の気が吹いている。

こないだからずっと天気だったけれども、今日はふしぎに雨が降った。やっぱり天皇陛下の死を涙している面があるわけです。天の涙だ。

「天地正大^{せいだい}の気」

という。藤田東湖のあの句も好きだから、時々引用してましたね。



「秀^{ひい}でては不二^{ふじ}の嶽^{がく}と為^なる」

天氣^{てんき}が、氣^きが、正大^{せいだい}の氣^きがだよ。

「発^{ひら}いては万^{ばん}朶^だの桜^{さくら}と為^なる」

桜^{さくら}の花^{はな}となる。

「注^たいでは大^{たい}瀝^{えい}の水^{みづ}と為^なる」

太平洋^{たいへいよう}、日本^{にっぽん}を取り巻^かいてゐる海^{うみ}となる。

「凝^こつては百^{ひゃく}鍊^{れん}の鉄^{てつ}と為^なる」

百鍊^{ひゃくれん}の劍^{けん}、日本刀^{にっぽんとう}。あれはみんな天^{てん}の氣^きがそのように形成^{けいせい}されたものだという、素晴らし
い句^くだね本^{ほん}当^{たう}に。驚^{おどろ}くべきものです。日本の詩^しのうちの白眉^{はくめい}だね。あとの方は非常に君臣^{くんしん}
の世界^{せかい}のことを言^いつてゐるけれども。

●聖名^{せいめい}のゆえにこそ

3 わが魂^{たま}を彼は

汝^{なんぢ}は

甦^{よみがへ}らせ、義^{ただ}しき道^{みち}に導^みき給^{たま}う、聖名^{せいめい}のゆえにこそ。

この

「聖名^{せいめい}のゆえにこそ」

が大事^{だいじ}だ。「義^{ただ}しき道^{みち}」というのは道徳^{だうとく}的な正^{ただ}しきではないんだ、この「義^{ただ}しき道^{みち}」という
のは。神^{かみ}さまの意志^{いし}を行^なずるのがこの義^{ただ}なんですから。その義^{ただ}のみち。漢文^{かんぶん}の聖書^{せいしよ}には

「義路^{ぎろ}」

と書いてある。この「義路^{ぎろ}」の方が本当^{ほんとう}はいい、道^{みち}よりも。路^ろは各々^{かくかく}の足^{あし}でもつて我々^{われわれ}が
歩^{ある}く小さなみち。一人^{ひとり}ひとり路^ろがちがう。それが義^{ただ}であるということは、天道^{てんたう}に即^{すなは}すると
いうことです。

「天道^{てんたう}地路^{ぢろ}」

天^{てん}の道^{みち}、天道^{てんたう}に即^{すなは}する。地路^{ぢろ}はみんな一人^{ひとり}ひとりそれぞれだ。ところが、それが天道^{てんたう}的な
性格^{せいかく}をもつてゐるといふときに、義^{ただ}なんです。天道^{てんたう}的な性格^{せいかく}といふのは、神^{かみ}さまの仰^{おほ}ると
ころに従^{したが}順^{じゆん}に従^{したが}つてゐる世界^{せかい}。アダムとイブがそれを最初^{さいしょ}にまちがえた。神^{かみ}さまの言^いい
けを守^{まも}らなかつた。

「人間の最初^{さいしょ}の不^ふ従^{じゆん}順^{じゆん}が樂園^{らくえん}喪^{そう}失^{しつ}、パラダイス・ロストに至^{いた}らしめた」

というのがミルトンの『パラダイス・ロスト』という詩^しだ。まあよくあの12卷^{くわん}の詩^しを、目
の見^みえない詩人^{しじん}が娘^{むすめ}さんたち三人^{さんにん}に口授^{くくつ}しながら書^かかせた。大変^{たいへん}な詩人^{しじん}だよな。ミルトン
なんて一言^{いちごん}で言^いえないですとて。あれは大学^{だいがく}を卒業^{くわつぎやく}してから5年間^{ごねんかん}ジーツと古典^{こくげん}を読^よん
だ。もちろんそれまでに勉強^{めいけん}したけれども。それでもう完全^{かんぜん}に彼は消化^{しょう化}してしまつた。ギ
リシヤ、ラテン、ヘブライを。それが土台^{どたい}になつてゐるんです、あの詩^しは。



バンヤンは牢屋の中で一生懸命に聖書を読んだ。それがバンヤンの文筆の土台になっている。バンヤン全集という3巻の大きなものを書いたかと思つてびっくりする。私はい本は、とても読めないことがわかつていても、買ってくるんだよ、宝だから。『レ・ミゼラブル』を――私はフランス語は全然読めないけれども――ユーゴーの素晴らしい3巻の本があそこにあるけれども、あれも買ってきた。敬意を表するんです、本に対して。私が死んだら、これは散逸したら勿体ないね。何とか方法を考えないと、小図書館みたいなものとか。いろんな本を私はもちろんこれから参考にしながら、詩を書くんです。

3 わが魂を彼は甦らせ、

義^{ただ}しき道に導き給う、聖名^{みな}のゆえにこそ。

この道は「路^{みち}」と訳した方がよかった。

我々の救いは全部、「聖名のゆえ」なんです。聖名のゆえ、聖名にあつて。だから、

「わが中^{うち}にあるものを汝に与う、イエス・キリストの聖名にあつて歩め」

と言つて、ペテロが生まれつきの跛者を立たせてしまったでしょ。この

「聖名にあつて」

と言う、聖名が実力をもっている。だから、

「主さまー」

と叫ぶことが、直ちに力の世界になる。グワーツと力が来る。

あなた方、カリスマなんて言つたつて、なにも人ごとではないですよ。あなた方が本当のそのカリスの世界に、キリストの恵みの世界に入れば、神さまはあなた方を通してふしぎなことも必ずしてください。人頼りは要らん。いいですか。自分で自分のわるいところを按手したらいい。できるよ。頭が痛かったら、手を当てる祈りの世界でやる。「お手当て」とはそのことだ、手を当てるという。おもしろいことを言つたものだね、

「チチンプイプイ」

なんてやる（笑）。やっぱりお母さんは、子どもにお母さんの愛が、生命が伝わるんだよな。それはもちろん、お医者さんやお薬を私はいらないと言つていのではない。

「病めるもの医者を要す」

とキリストは言つておられる。けれども、本当の生命は――それ「医者や薬」はどこまでも補助の手段であつて――生命の生命はキリストである、神さまであるということを、この根底を忘れたらダメです。

● 僕の伝道はまちがつていたよ（塚本）

その次は地獄的なところだ。

4 また縦^{たど}い死の陰の谷を渉^{わた}るとも

私は禍害^{わざはひ}を恐れない。



あなたが共に在^いますから。

あなたの答^{しもと}、あなたの杖、それが私を慰める。

「答^{しもと}」というのは、先に尖った鉄がついている。狼や悪者が来たらそれでやつつける。守ってくれる。「杖」というのは、「こつちへ行きなさい、あつちへ行きなさい」と導く杖です。だから、導者（牧者）は外敵から守る答^{しもと}と導く杖の二つを持っている。それが私を慰めてくださるという。

「死のかげの谷を渉^{わた}るとも私は禍害^{わざわい}をおそれない」

と。死のかげの谷を通つても、あなたは一緒に来てくださる、迎えてくださる。三途^ずの川ではない。天国だと。仮に死んだ人が、花園やなにかの幻を見て、ちよつと行きたくなるそうだな。ところが、後から

「帰つて来なさい」

というような親しい人の声を聞くと戻ってくる。声がしないと本当に逝つてしまうという、そんな話を聞いたことがある。

無教会信仰のある人、あの絵（董の抽象画）を書いた人が無教会信仰だった。ところが、私が、その人の死ぬ一週間前に訪ねて行つて、はつきり信仰告白をした。そうしたら、その人は喜んで、

「今まではちよつと本ものではなかった。私は最後の二週間に救われた。いわゆる

無教会信仰だったらダメだった」

と言った。無教会の中で、

「ああ、「私は」まちがっていた。小池さん、あなたは本当だった」

と言つてくれたのは一人もいないんだ、まだ。それくらい私のものは、私の名前は嫌いだし、私のものは読まない。それからまた、著作集を買つて読んでいる人もあるが、けれども、本当に読んでない。だから、さっぱり分からない。人の悪口を言っているのではないですよ、私は真理を言っている。

塚本先生が――このこともこないだ原始福音の連中にはつきり言つたんだ、壇上から――

「塚本先生は10年間あの訳のわからない病氣になつてしまつたけれども、その前に私がお訪ねした時に、本当に2時間くらい大変なのしく先生とお話しました。その時に先生は、

「僕の伝道はまちがっていたよ」

とはつきり言つた。ということは、ただ学問的であつて本当の生命の世界ではなかった。先生はもちろん生命をいただいています。けれども、まだそれは、もう一つ足りなかったということですよ。「まちがっていた」という。

「手島君のと君とが本当だ。西の手島にマッチすることができるのは君だけだ。しつかりやつてくれ」

と。もう遺言ですよ、私に。塚本先生は最後に、



「無教会はまちがっていた」

ということを代表して仰ったようなものだ。それは宣言はしなかったよ、先生は。自分の無教会がガタガタになるからね、そんなことを言うよ。

「手島、小池を肯定した」

なんていうよ。ということは、なにも「手島・小池」ではないんです、本当の福音に逆らっていた。ステパノの言葉で言わせれば、

「汝らは聖霊に逆らう」

なんです、本当は。それは、

「聖霊に逆らう罪はゆるされない」

と、キリストがはつきり言っているから、おそろしいよ。

「私のことを悪口言ってもいい。だけれど、聖霊に逆らったらダメだぞ」

とキリスト自身も仰っている。人間小池は何と言われても一向に差し支えない。

「先生がこんなことをした、あんなことをやった。あんなことを言った」

と、何でも言いなさい。ただ、そんなことを他の余計な人に言ったら、こちらは私自身はどうでもいいけれども、他の人たちが迷惑する。自分自身がまたおかしくなるよ、そんなバカらしいことは。

私は前進してやまない。それは必ず勝つんです、本当の世界は。ヒルティが言っている、

「時が必ず審く。人の弁護も、自分の弁解も何もいらん」

と。本当のものは、

「真理はそれ自身を自ら保たしめる」

という言葉がある。

「我は真理なり」

という、あの「真理」という言葉は本当はただ「理」ではない。真相、真のすがた。キリストは神の真相なんだ。だから、キリストに来て、神さまを見ない人はいつまでたっても神さまは見えない。

「神はどこにあるか？」

なんて、何を言っているか。神はキリストに来ている。いずこにありや、イエス・キリストにある。

「我を見しものは父を見しなり」

と。とにかく、イエス・キリストというかたは桁ちがいです。お釈迦さんもちろん私は尊敬はします。けれども、キリストはケタちがいです。

「死のかげの谷を渡るとも、その死という禍害^{わざわい}もおそれない。もう実は死を乗り越えています」

という世界。だから、天皇陛下のことを申し上げては申し訳ないけれども、天皇陛下が本



当に福音の世界にいらっしやったら、

「もうそんな輸血なんかよせ、俺はもう神さまの召されるままに逝くんだ」

と仰って下されば、もつと光ったね。天皇陛下はそういう気持の素晴らしい方なんだが、やっぱり宗教の世界は……、ということではないですか。だからといって、天皇陛下は天界に行けないか、そんなことを言っているのではない。天皇陛下は天界にいつてらっしやいます。もちろんそうだと思いますけれども。信仰告白はなされなかった。それは周囲のやつらも、どうだか知らんけれども。

●上から中に入って来る力

4 また縦い死の陰の谷を渉るとも

私は禍害を恐れない。

あなたが共に在ますから。

あなたの答、あなたの杖、それが私を慰める。

「ともに」は、旧約の世界は「ともに」だけれども、新約では今度は、

「あなたがわが中に在りたもうからである」

と、「の中に」ある。

「み霊のあなたが私の中にいらっしやるから、私は死んでも死にません」

と。死の関門はヒルティが、

「死ぬというのは隣の部屋に行くようなものだ」

と言った。

あなたの答、あなたの杖、それが私を慰める。

「憐れみある者は幸いなり、その人は憐れみを受けん」

と。私はあの山上の八言のうちで一番好きなのはこの言葉です。それは、第一言の、

「幸いなるかな霊の貧しき者、天国はその人のものなり」

は何といったって土台ですよ。その次は、それと離すことができない言葉は、

「憐れみある者は幸いなり、その人は憐れみを受けん」

です。人を愛することなくしては、神さまの、キリストの愛にはあずかれない。人を愛するとは、助けること、救うこと。キリストの愛がくれば、人を愛さざるを得ないはずなんだ。私は十字架であがなわれ、永遠の生命をこの聖霊でいただいている。これがキリストの愛の内容だから。そうしたらもう、人を愛し人をゆるす。ゆるしを受けとらなければ仕方がない、いつまでも反抗しているなら。お互いにかくもキリストに絶対的に無条件にゆるされた者が、人をゆるせないはずはないわけです。いかなる問題も、一対一でもって話しあえば、「解決が」つくんです。十字架の下で。聖霊の下で。それを他人に

「どうだ、こどうだ」



なんて言っていたら、いよいよ紛糾するだけのななし。いいですか。魂の世界はお互いに対いで話し合って、十字架の下で、聖霊の下で、

「53分の35」〔十字架を土台にした聖霊〕

の現実でもって話し合って解決しないことは一つもない。もし解決しないなら、その人は「53分の35」を受けとっていないからです。それだけの世界ですよ。ええ。

私ははつきりとそのことは詩の中に書く。だから、ダンテやゲーテに詩としてはかなわなくても、内容的には彼らの上をいく。何をなさっても、文学でも、音楽でも、あるいは治療のことであろうと、事業のことであろうと、技術のことであろうと、何のことであろうと全部それはそこに栄光が現れる。だから、

「来たりて見よ」

というんだよ、この福音の世界に。私は自己宣伝しているのでも何でもなし。キリスト宣傳をしている。上から烈々たるものが来て圧倒されているから語っているんです。自分の信仰でなんかで語っているのではない。

「私の信仰」

なんてものは相手にしてませんから。そんなものは頼りにしてません。キリストの信をいただき、キリストの愛をいただく。全部、上から来ている。それに圧倒されている。だから、「本当の無の世界は無限無量だ」

と言っている。どこが間違っているというんですか。

●父の全きが如く全かれ

今度は、5節、6節は煉獄の世界、現実の世界です。

5 あなたはわが眼のあたりに^ま筵を^{えん}備え給う、

わが^{もろ}諸々の敵前で。

正に諸々の敵前だ、私も今までも。これからもあるでしょう。ところが、もう敵が敵でないんです、正直。「敵を愛せよ」と言うけれども、もう敵はいないんだ、本当は。敵なんてものを思うことも要らなくなってしまう。全部包摂してしまうから。これが

「父の全きが如く全かれ」^{まった}

の世界です。

「善き者にも悪しき者にも、正しき者にも正しからざる者にも、日を照らし、

雨を降らせる」

その恵み、絶対の恵み。

「相手がどうであろうと、そんなことはどうでもいいんだ」

ということが、もう敵のない世界です。相対的善悪も、相対的な敵味方もありはしない。全部これを包摂してしまう。絶対次元の世界だから。そのキリストの言葉ですよ。あれは



最大の言葉です。「父の全きが如く全かれ」という。手放して誰が全くなれますか。

「父の全き」

というのは、聖霊が全きを持つていらつしやるから、

「聖霊の中に入れ。そしたら、いくら破れていてもいいよ。必ずそこに全きというものが現れるぞ。完全性というものがそこに現れるぞ」

ということ。

「三日月が満月を抱く」

と書いたでしょ。満月が三日月を抱くのではない。三日月が満月を抱く。

『宗教新聞』の元日号に私は「福音と教育」ということを書いた。そこに第十卷『聖書は大ドラマである』の広告を掲げた。

「本書（第十卷）は全聖書から366箇所を選んで原典から私訳し心血を注いで解説したものだ。この一巻は聖書の部分でありながら全体の投影である。いわば満月を抱いている三日月である。我々人間の生涯は正にドラマであるが、いかなる人のドラマも聖書の中にある。」

そうですよ、どんなドラマも聖書は持っています。これは旧約から新約まで読んでごらん下さい。あらゆる人間の場面が出ている。いつわりなく聖書は書いてあるからね、どんな悪いことも。殺人も姦淫も盗みも偽りも何でも出てきている。

そして、それを深く共感しつつ、光と歓喜の根源的な現実^に救いあげてくれるのが聖書である。

ドラマをそのまま肯定しているのではない。そいつを本当に救いあげる。それでいいと言っているのではない。そのドラマでもつてドラマを救うんだよな。

著者はこの一巻に全生命をかけた。深い涙をもってこの一巻を万人に捧げる。」

この広告が一番いい文章です。もう一つキリスト新聞にも書いたけれども、この方がよかった。この短文に私の精神が表れている。皆さんもアーメンでしょ。

あなたはわが首^{こゝろ}を油漬けにし給う、

ああわが酒杯^{さかずき}は溢れた。

「油注ぎたもう」ということ。油というのはオリーブの油です。「油注がれたる者」というのは、オリーブの油を注ぎながら、聖霊を与える儀式を旧約からやっているわけです。サムエルがサウルにやった。サウルは油注がれて、同時に聖霊が臨んだから。油に何も聖霊があるわけではない。あれはひとつの徴だから。霊的なみ霊の人が按手すれば霊が降る。

大体、12召団の方々は、特別の集会で私が按手してひっくり返った人が大方なんだから。しょうがない。だから、それが「油注ぎ」なんだ。聖霊が注がれた。聖霊を注がれながら、十字架が土台になっていないとダメになっていく。そういうのが集会から逃げていく。もうわかってる。



「ああ、おれは間違っていた」

と帰ってくる人が、まあ例外的にいらつしやるくらいなものです。私は時々祈っている。昔の写真をみていると、みんないい顔しているんだよな、笑って楽しそうに。どうしているかなと思つてね。何も憎んでいませんよ、私は。どんなに叛かれても。私が憎んだら、聖霊はどこかへ行つてしまうもの。うん、本当ですよ。

「お気の毒ですな」

と、それだけだ。私はいわゆる立派な牧師じゃありません。破れ器です。けれども、この破れ器に生きているところの十字架・聖霊の事態は、全世界といえども決して負けない。それだけのものをいただいているから。破れ器の破れを見て逃げて行く人は、いくらでも逃げて行つてください。結構でございます。私は教会の牧師さんみたいに、一生懸命でその会員にしようなんて思わないから。

「来るも去るもご自由でございます。ただ神さまの審きにあわなくてください」

と、それだけのことはなしだ。けれどもこの一点でもつて共感する人は、僕がひっくり返つたら、

「先生、私が担いでいきますよ」

と、それくらいの魂が我々の交わりではないですか。あなた方、「私が」躓いたら、怪我したら。私はこれから12年間かつて詩を書くよ。詩を書くのは決して生易しい仕事でない。もう山巔さんてんに行つた時、私は傷だらけになつていと思う。いいんだよ、それで。

●キリストの本願は私たちを追跡し圧倒

6 誠に善福さいわいと恩恵めぐみとが私を追跡する、

「さいわい」という字は

「善福」

と訳しました。この「トーブ」というヘブライ語は特に「さいわい」(福)という字と「よろしい」(善)という字と両方ひつかつたような字だから。むしろこの善福は、もうひとつの字は「美」、美うるわしいという、

「美福」

でもいい。美わしいさいわいでもいい。そして、恵み、「恩恵」。これは「ヘセッド」という字です。ギリシア語でいうと「カリス」です。「トーブとヘセッド」が、「善福と恩恵」とが私を追跡する。追跡してくれるんだからありがたい。こつちから追つかけるのではなくて、あとから追跡してくる。これが本願のすがたなんです。神さまの本願、キリストの本願は私たちを追跡し圧倒してくる。圧倒し追跡してくる。こつちから求めているのではない。

「求めよ、さらば与えられん」

とは、

「私の方から求めているよ」



という―むしろそうなんだ―キリストの言葉なんだ。

「私はお前を求めている。はやく戸をあけろ。そしたら、入って一緒にご馳走を食べるよ」

と。ヨハネ黙示録の3章。あれはいい言葉だね、こんどの第十巻にも出てますよ〔12月25日の項「視よ、我れ戸の外にて立ちて叩く」〕。私は自分で読んでいて楽しくてしょうがないんだ、この第十巻は本当に。そして聖書のその関連の箇所も読んでね。皆さん、楽しくやってくださいよ。なんかしかめつつらでやらないで。福音の世界は楽しいんだから。私が烈しいことを言う、なにか恐くなるのかな。恐くはないよ、ひとつも。私は生命に満ちて圧倒されているから、それだけのなし。私は絶対に老いばれないよ。

「先生は、あんなこと言っていたけれども、とうとう老いばれた」

なんて（笑）。老いばれたら、み霊が抜けた証拠だ。まあしかし、人間の生理的な面は知りませんよ、どうなんだか。知りませんが、私の魂はとにかくそうだ。まあこうやって集会していてもつてぶつければ本望だよ。あなた方は迷惑するけれども。でなければ、山へ行つてどこかで人知れず、

「居らずなりき」

なんて最高だね、エノクみたいに。あれは36年生き永らえて逝った。私も36年生き永らえてエノクの如く「居らずなりき」となりたいたいけれども、ちよつとこれは無理だな。

私は宗教新聞にも書いた。クラークが、

「ボーイズ・ビー・アンビシャス」（少年よ、大志を抱け）

と言ったけれども―あのあとに彼は言ったか言わないか知らんけれども―

「イン・クライスト」（キリストに在つて）

というこの句があるはずだ、彼の精神は。

「キリストに在つて、大望をいだけ」

と。「イン・クライスト」がなかったら、ただ「大望をいだけ」だけだったらダメなんだと、はつきり書いてやった。

「教育者は神仏に対する畏敬の念がなかったら、本当の教育はないぞ」

と。宗教新聞だから、仏教のことでも大いに肯定して書いてやったんだ、もちろん。仏道の世界でも第一流の、超一流の坊さんたちは素晴らしいからね、正直。

●人生の歌（ロングフェロー）

わが生命いのちの日の限り。

「生命の限り」というのは旧約聖書では地上の生涯のことです。

かくて私はエホバの家に住む、

日に日が続き果てるまで。



あのロングフェローの詩に「人生の歌」(A Psalm of Life)というのがある。もちろんそれよりもこの詩篇23篇の方が素晴らしいのに相違ないんだけど。

「言つ勿れ悲しき調べに、

『人生は槿花一朝の夢!』と。

魂魄まどろみて死に似たるとも、

見ゆるところは真相に非ざれば。

人生は真実なり、人生は厳粛なり。

漢字の熟語に日本語のルビを付けると、渾然とその意味がでるから、私はこういう書き方をすればいい、今はあまりこういうことは流行らないけれども、まあしょうがない。

瑩穴いかで終結ならんや。

墓場がお終いではないぞと。

『塵より出でて塵に還る』

そは靈魂の謂にはあらず

肉体はなるほど亡びていくが、魂はそうではない。いや、肉体のあとに実は霊体を、霊的な体をいただくんだということは、彼は書いていませんけれども。

楽しみも悲しみも

わが命数にも道路にもあらず、

路は実存にあり、明日の我は

今日の我を乗り越えてゆく。

これはその通り。

芸術は劫く時世は流る。

「芸術は長く人生は短い」というあの句から来ている。「芸術」(技術)というのは本当は医術のことです。

われらが心臓縦し堅くして勇むとも、

音もかそけき鼓の如くつねに奏つ

奥津城に到る埋葬の曲を。

そういうような、人生のはかなさを言っている。

此世の戦の広き場にて

人の生命の露宮の野にて

もの言はぬ牛馬として駆らるる勿れ、

戦闘の丈夫たれよ!

「ヴィヴェーレ・ミリータレ・エスト」(Vivere militare est.)

これはセネカの言葉だ。

「生くるは戦いなり」



という。ウルガタのラテン語訳の聖書のヨブ記7章1節は、

「ミリテア・エスト・ビターホミニス」

「戦うことは人生である」

となつてゐる。

「それ人の世にあるは戦闘たたかいにあるがごとくならずや」(ヨブ7・1)

という言葉です。戦いはしかし自分自身との戦いです、本当の戦いは。

「自分自身との戦いが最大の戦いで、それに勝つことは最大の勝利だ」

というのはカントの言葉です。

樂しからん後の日をたのむ勿れ！

逝きし死をして死を葬らしめよ。

これは「死者をして死者を葬らしめよ」というあの言葉。ところが、あれは誤訳である。アラミ語のキリストの言葉をギリシア語にするときに間違えた。キリストはそんなことを仰つたのではない。キリストは

「死者は葬儀屋にまかせよ。お前は神の国を伝えろ」

と仰つた。「ミッタ」(葬儀屋)と「マッタ」(死者)という言葉で、母音がないものだから、両方とも「マッタ」にしてしまった。

「マッタはミッタにまかせよ」

「死者は葬儀屋ミッタにまかせよ」

ということ、キリストは何もへんなことを仰つたのではない。学者がいろんな註解を書いてゐるけれども、みんな間違えてシマッタというわけ(笑)。それが註解書に書いてない。このことを教えてくれたのは、アラミ語の聖書を勉強していた松本さんという人です。

アラミ語の聖書というのは、マタイ、マルコ、ルカはキリストの言葉を口伝えでちゃんと伝えていた。口伝えというのは案外これが本当なんです。日本でもそうなんだ、昔の口伝えというのは。よく暗記している。それを今度は当時の英語であるギリシア語になおすときに間違えた。ギリシア語を原典としてゐるけれども、原典のもとの資料は実はアラミ語のそういう言い伝えであつた。だから、アラミ語の聖書というのは、ある意味においてギリシア語の聖書よりもっと大事な面が展開してゐるわけです。

とにかく、パウロが書いた直々のものが残つてないし、旧約のどの預言者の直々のものはみんな残つていない。みんな写本だから。おかしなものだね、これが本当の原典ですというものが無いんだから。どういふことなんだろうなこれ、ふしぎでしょうがない。何か本当の原典があつたつて良さそうなものだけれども、焼いてしまったのか、朽ちてしまったのか、どこかへ隠してゐるうちにおかしくなつてしまったのか。

ただ、そのところを本当にみ霊はその奥の響きを読む。そして聖書の真理は弾力性をもっているから、その人その人がそれぞれの――決して主観ではないですよ――み霊の光と智



慧でもって読まさせていただくわけだ。

働け！ 働け活現の今！

衷に心情あれ、上に神在ませば！

上にばかりでなくて、中に居る。そういうところで、やっぱりロングフェローも限界があるわけです。我々の世界がいかにキリスト直結の、使徒たちの現実であるかということを、こういうものを読んでいけると分かる。みんなどこかにズレがきている。みんなといっては悪いけれども。

偉人の生涯を想ひては

われらが生を崇高になし、

離別に臨みて我らも

時の砂漠に足跡をとどめばや。

足跡、そはおそろく兄弟の、

人の世の厳かなる海原を漕ぎゆきし人の。

これを見て寄るべなき難破の者は

再び勇み振ひ起つらん。

まあそういうこともあるでしょうね。

いざ我ら起ちて為さむ、

万難に耐ふる心根をもて

愈々達しては愈々追求め、

働くを学び、待つを学ばん。」

「いよいよ達してはいよいよ求め」というのはパウロのピリピ書の言葉に似ている。

「自分はもう既に得たりと思わず。更に追求する」

というような言葉があった。それは与えられるからいよいよ求めていくということです。いわゆる理想主義でも、いわゆる浪漫主義でもない。恩寵の世界は展開してやまずという。

●僕の十字架はまちがっているでしょうか(手島)

手島さんがつくった詩がいくつかあるけれども、私は一番好きなのはこれなんだ。

「寂しさの極みにたえて祈らまし

暮れゆくみ空にたま極るまで」

素晴らしいうただね。

「主は近し大君イエスの御代近し

あつき涙もて御前に仕つ」

「二つなきころを主にとどめおき

我さえ我にわかれぬるかな」



これは誰かの句をもつてきたらしいけれども、素晴らしい句です。

「生き死にも神のまにまに」

キリストの御使の如く仕えまつらん」

「山は裂け海は浅せなむ世なりとも

君にふた心わがあらめやも」

これは実朝のうただけけれども。これを彼は讚美歌にした。手島さんの気持はよくこの讚美歌にあらわれている。彼も本当に涙をもっていた。

「われさえわれに別れぬるかな」

といって、キリストまで突入している彼の姿もわかる。もう絶対安静なのに、私が訪ねて行ったら、客間までやってきて、そして話して、祈った。その時に、

「先生、僕の十字架はまちがつているでしょうか？」

と訊いた。私はそれに対して、

「いや、十字架なんていうのは一言でいえるものではないから、ああ結構です」

と言っておいたんだけど。実はちよつと、やつぱりそうやって、

「まちがつているでしょうか？」

と彼がきくだけ、彼にちよつと十字架に対するあるひとつの疑問があつたんだね。その点はお気の毒でしたけれども。

それから、私が帰る時にちゃんと玄関までやってきて――彼は絶対安静だよ――合掌して別れる。その時にも今日みたいに雨が降っていた。彼のその最後の姿は今でも目にありありと浮かんできます。その彼の友情に対して私は決して裏切りません。一番私を本当に分かってくれたのは彼だったから、何といつても無教会でお互いに。お互いの欠陥も、短所も長所も。まあいろんなことをしゃべって申し訳ありません。けれども、詩篇の23篇はそのようにして、我々の人生の歌。これは『人生の歌』という本を藤井先生も書いた。

「わが首に油を注ぎ給う。」

わが酒杯は溢れるなり」

という言葉が大事です。我という酒杯ですよ。

「我という酒杯は聖霊で溢れている」

ということですが、新約の光で読むと。私たち自身が酒杯なんだ。それが聖霊で溢れている。迸つてしょうがない。

「汝の腹から泉が湧き出でるぞ」

とキリストが言われたのは聖霊のことですから。サマリヤの女に言ったあの言葉です。

いいですか、皆さん、そういう気持で楽しく勇ましく、今年はいよいよ進んで行きましょう。言外無量であります。おわります。

